「お春」（1897）

「あの女性がいったいどなたか、皆さま方はご存知か？　ぼけっとしていちゃいけないよ。芸者のなかでも最高の、お春という方だよ。純粋で、優雅で、神秘的な美しさを持ち、うっとりするような最高の舞妓でもあるんだ。このお春という芸者は、ギリシア神話にある、人を夢心地にさせる果実のような存在で、富士山に匹敵する日本を代表するような美形でもあり、われらの誇りということよ。アメリカでつまらん晩年など過ごさないで、日本の豪勢な祭りの行列に参加して、お春と知り合いになったらどうだい。お春はでっかい山車の一番上に乗っかり、感嘆の叫びをあげている大勢の人たちを前にして踊るんだ。おまえさんは幸せ者だよ。日本の芸者崇拝の聖地とも言うべき茶屋にいるんだから。このような所にいられる運命を与えてくださった父なる神に感謝しなくちゃ！　特に、ここに来ることにたいへんなご尽力をいただいた有名な右大臣殿には、感謝の気持ちを忘れちゃだめだよ！　素晴らしい踊り子で、神々しい美しさを備えたお春を見ていると、元気が湧き出てくるような気がするんだ。芸者や舞妓の最高峰であるお春の踊りを満喫したらどうだい！」

お春の舞踊に拍手喝采があり、以上のような声が客の中から聞こえた。有名で栄誉ある右大臣が、日本の娯楽の一端を紹介しようと、大英帝国の貴族を伴奏と歌謡と舞踊を伴った晩餐会に招待していたのだ。その席のために、最も名だたる芸者たちや歌い手、伴奏者たちが雇われていた。それらの者たちは、大英帝国の貴族に負けないぐらい、芸の技術や立ち振る舞いのあでやかさの点で超一流であった。おそらく十数名の芸者たちが右大臣をもてなしていたのだが、終わってみるとお春に対して一番拍手・喝采が多かった。

芸者や舞妓は、日本の女性のなかで最も聡明で、知的で、教養があり、美しいことを条件に選ばれ、幼少の頃から芸道の修業をする。その修業は、人をひきつける優雅な舞踊や人柄だけでなく、歌謡や伴奏、もてなしの心で客に仕えるといった多岐にわたる作法にまで及ぶ。もちろん、精神の鍛練も例外ではなく、心配りや知性、会話の訓練もあり、これらの面でも最高の女性を目指す。要するに、芸者や舞妓が行なう稽古の究極の目的は、芸の魅力を高めることだ。稽古においては、西洋の女優とほぼ同じ立場である。多くの芸者や舞妓は、茶屋での宴会を飾るはかない麗人だが、その仕草の所々にきらりと輝く一面が見出せるのである。

お春は舞踊が終わると、その美貌、明るい笑い声、魅力あふれる人柄で、右大臣にいつものように気転をきかせてお仕えし、皆の前に現われ興奮の渦に包まれた。お春は日本人にとって理想の美形であるが、西洋人をも魅了するものをもっている。体形はすんなりしており、胴長であ

り、尻は小さく、しなやかな優雅さを醸し出しており、自然な身のこなしによってさらに魅力が倍増している。上半身はまるで少女のようである。地味な折り目の着物に被われた官能的ななまめかしさは、完全には表面に現われない。未婚女性の控えめできしゃな体形であると言っても過言ではないだろう。長細く、美しく湾曲している首は、上品にぶら下がっている形のよい頭に似合いの台座にすぎない。髪の毛は長くてまっすぐの艶々（つやつや）した黒色で、色艶のよい前頭部の上のほうから後ろへ櫛（くし）でかき分けられている。上品な楕円形の頭部にみごとな髪の毛が乗っかっているのである。長細い目のかなり上のほうで、眉毛は弓なりに曲がっており、線がとても精妙に描かれているので、浮き上がっているように見える。鼻は高くなく、口は濃い紅色のおちょぼ口である。顔の色は透き通ったような淡いクリーム色で、いつもの頬紅が純粋さを暗示しているが、頬の色を見ていると、内面の変化によっていろいろな連想が微妙に浮かんでくる。ある時には激情の極致になっていたり、またある時には温和な表情になっていたりすることがかすかに分かることがある。このように顔の表情は一瞬たりとも同じであることはなく、そのときの気分や思考状態を映す鏡のように変化する。時には快活で機嫌のよい陽気さ、またある時には心の奥深いいかめしい心情が見られる。つまり、頬の色は女性としての本当の深層心理を表わしているわけである。

「お春はまさに夢心地になる対象で、日本を代表する富士山のような存在でもあり、われわれの誇りなんだ！」という、お春を絶賛した客の言葉が真実味をおびてくる。

太鼓の伴奏が終わると、三味線（しゃみせん）の音が聞こえてくる。深紅（しんく）色や黄色の着物を着た芸者衆が、秋の風に揺れる可憐な楓（かえで）を表現している舞踊を披露する。が、居合わせた者たちの目と心は、お春に向けられている。うっとりさせるような美しさと特異な知性により、皆はお春の虜（とりこ）になってしまう。高貴な右大臣の老衰も、お春のたまらない魅力の前には消えうせる。まもなくお春は席を離れ、今晩最後の舞踊のために着替えているあいだ、お客たちは彼女の素晴らしさについてえんえんと話をする。

お囃子（はやし）が聞こえてくると、昔の侍用に完全武装した鎧兜（よろいかぶと）を身に着けたお春の登場である。侍とは日本の中世の武士のことで、その本分は「忠誠心」という一語に包括されている。その忠誠心はとても純粋で永遠に変わらないものであり、妻や子ども、一族などとのあらゆる人間の絆、ときには自分たちの信じている神さえも、必要とあれば自分の主君である大名のために犠牲にしなくてはならないのである。これから演じられるのは、お春の十八番の一つであり、赤穂（あこう）浪士の首領である大石内蔵助（くらのすけ）の生きざまを描いた「忠臣蔵」で、亡君の仇討（あだう）ちを主題にしている。考えに考えぬいた大石の復讐心は堅固なもので、妻を離縁したり、子どもとの縁を切ったりしている。

お春は、自分の先祖を十二分に意識して演じた。大名のお気に入りの娘として侍の血を受け継

いでおり、将軍政治の激動の苦しい体験を間接的に経験していた。また、数世紀にもわたる鎖国の絶頂期も間接的に経験しており、中世の日本の誇り高き崇高さを引き継いでいる。要するに、日本民族のすべての誇りを、遺伝子と伝統によって継承しているのである。父君の荒々しい血が燃え盛り、お春のすらりとした肉体は大石の焼けつくような激情に合わせて共振しており、観ている者にとって息が詰まるようであった。お春は昔の英雄を勇ましい足取りと身振りでみごとに演じきり、観客は畏敬の念から静まり返った。最高に優雅な舞踊を前にして、観客は盲目的に心から崇拝し固唾を呑んで見守った。明るい照明が消され中世の日本の姿を真に迫る演技で再現されると、茶屋の賑やかさや芸者たちの笑い声もなくなっていた。憂鬱や悲しみ、苦悩のどん底から嵐のような激情と仇討ちに対する執念へと展開し、ついには、小刻みの荒々しい調子の伴奏とともに、大石は大名に仇討ちをする。これで大石の願望はほぼ達成されたわけであるが、最後に「腹切り」という劇的な結末が待ち構えている。人生の希望や喜びをいっさい捨て去り、大石は切腹をし、主君に続いてこの世から姿を消す。鋼鉄の刀がきらりと光り、それが腹に突き刺さり、お春は死んだふりをして舞踊は終わりとなる。観客は拍手喝采一切なしで涙目になり、芸者たちはすすり泣いていた。お春は高まる感情に圧倒され、ぎらぎらした目で胸をふくらませ、右大臣に挨拶もせずに、また観客にもいつものお別れの挨拶をしないで、動揺した様子で目に涙を一杯ためて舞台を降りた。

お春はようやく家にもどり、行灯の柔らかな光を浴びながら、夢想にふけっていた。だが、それは茶屋での酒宴のことではなかった。見知らぬ国にいる勇敢な豊臣という男のことを思い浮かべていたのだ。冒険好きの豊臣は、お春の娘時代の恋人で、成人してからも思いは募るばかりであった。

お春と豊臣の出会いは一風変わっていた。二人とも侍の血が流れているが、豊臣の父君は繁栄していた。一方、お春の父君はもうすでに亡くなっていたので、孤児として茶屋の主人のもとで生活をするようになった。そこで娘時代を過ごし、洗練された芸者のあらゆる芸やたしなみの修業に明け暮れた。お春の結婚適齢期の頃に豊臣と出会い、その後芸者遊びのためにしばしば茶屋に足を運んでいた豊臣に、恋心が芽生えるようになった。

二人の恋愛も一風変わったものだった。当時の一般社会の伝統や慣習とは異なり、両親が子どもの結婚相手を選ぶわけではなかった。だから豊臣は悶々やるかたなく、お春との結婚に向けて内密に事を運んでいた。茶屋の主人は、慣例的にお春の結婚に反対した。というのは、お春は契約上主人のものになっており、茶屋の常連客に指名されて、みごとな舞踊を披露するのが本分であるからだ。ところが豊臣は、お春のことがどうしても頭から離れなくなり、ある日、自分の全

ての財産を売り、茶屋の主人に身代金を支払った。このようにしてお春は、茶屋の主人から解放され、自由に豊臣を愛し結婚することができるようになった。このことをお春は、一日たりとも忘れたことはなかった。

　豊臣は野心家であり、一文無しになっても貧しいことは一向に気にしていなかった。二人は結婚の約束をし、お春は舞踊を続けることにした。一方、豊臣は海を渡り、白人の野蛮人が住む国に行って財を成し、たくましい男になってもどってきたら、お春と夫婦（めおと）になると約束した。異国での暮らし向きは、たまに送られてくるごく短い文（ふみ）以外には知る由（よし）もなく、豊臣の放浪の旅のことはほとんど分からないままであった。十年の歳月が流れ、お春は豊臣の富に頼らなくてもいいように自分でお金を貯めながら、恋人を待っていた。お春は裕福になっていた。いや、たいへんな資産家になっていたと言っても過言ではなかった。そのわけは、もはやお春は誰かに雇われた人気芸者ではなく、人々の崇拝の対象でもなく、華族たちの自暴自棄の対象でもなくなっていたからである。自分の恋人のお陰で、自由で独立した身になっていたので、もう茶屋の主人に稼ぎを没収されることはないのである。でも豊臣の不在中、お春の身の回りにはいろいろなことがあり、人生はけっして平坦な道ではなかった。お春の旦那になりたいという誘いはたいへん多く、それは熱心なものであり、その大半は光栄ではあるが強引なものであった。そのなかには、強引な手口で結婚を迫ってきた金持ちの絹商人をはじめ、海軍の大佐、大名の息子、そして、帝国大学の威風（いふう）堂々とした教授もいた。それらの者は皆、お春の魅力の虜になっていたのである。だがお春は、娘時代の恋人であり成人してからも憧れの人である豊臣のために純潔を守っていた。お春は、現世の苦悩を忘れるために、いつも純潔を大切にしていたのだ。こういう中お春に、豊臣帰国の吉報が舞いこんだ。翌日、蒸気船が横浜に到着するので、お春は汽車に乗ってはるばる出迎えに行くことになった。

　お春は喜びのあまり、かわいらしい涙で目を曇らせ頬を濡らしながら、近くに置いてあったクスノキ材でできている収納箱の蓋を開け、綿製の多くのひだがついている包みを取り出した。その包みを解くと、中には美しい絹でできた腰に巻く帯（おび）があった。これは女性の婚約の象徴であり、豊臣がお春と婚約しているということを意味していた。再び収納箱を開け、今度は、侍の父君の形見である二本の刀を取り出した。日本民族としての深遠な誇りと威厳のある愛国心を胸に秘め、お春はじっと真剣にその二本の刀を見つめた。そうすることによって、豊臣への想いから時々忘れかけていた父君がとても身近に感じられた。お春の父君は厳格で老練な武士であるとともに、騎士道精神を持った剣道の師範でもあった。長いほうの刀で大名の家系を長いあいだ守りぬき、万事休すの状態になればもう一方の短いほうの刀で腹切りによる名誉ある死を選び、皆の大赦（たいしゃ）を

相手に懇願した。蓮の花が咲く暑い日の夜、お春は父君の最も貴重な遺品であるこれら二本の刀を前にして眠った。朝になると、髪結いは、お春がにっこりとした顔つきですやすやと眠っている姿を見かけた。

ああ、豊臣とはなんて乱暴で残酷な男なんだろう！　日本に帰り夫婦になって一年が経過してしまった！　この間の結婚生活は、苦痛の連続であった！　お春は純潔を守りながら、豊臣の帰国を首を長くして待っていたのに、まさに天国から地獄に落とされたようであった！

お春が横浜港の桟橋で出迎えたとき、豊臣は西洋の服を身にまとっており、何と威厳があり高貴に見えたことか。そのときは、たわいもない夢がやっとかない、豊臣は最高に立派な男になったと、お春は心の底から思った。だが、ああなんという心の変わりようか。でもそのときは、豊臣が放浪していた外国の悪魔のことを分かってはいなかった。豊臣はこれらの悪魔がもたらした多くの慣習を身につけて帰国したのだった。

豊臣の浪費癖！　これには心底仰天した。浪費癖といっても、尋常でないのだ。お春は以前から、外国では簡単にお金を稼ぐことができることを承知してはいたが、お金を使うことがそんなに容易であるとは、そのときまで知らなかった。だが悲しいかな、豊臣はそうした浪費癖を身につけていたのだ。お春は東洋人特有の倹約の美徳をもつ締まり屋だったので、そのような浪費はたいへん不愉快で、押しつぶされそうな気がした。豊臣を信頼して、お春は妻としての服従心から全財産を譲り渡してしまっていた。そのお金は汗水たらして働いたあげくに手に入れたもので、それを湯水のように使われてしまったのだ！　ああ、何ということか！　結婚後一年すると、お春の財産は一銭も残っていなかった。

豊臣は「白い悪魔」の国で多くの習慣を身につけていたが、何とそこでプロレスラーになっていたのだ。誇り高く多額のお金を稼ぐことがたびたびあるとはいっても、レスラーとは何という変わりようか。知りあいはごろつきや女郎であった。また、下品な茶屋にもしばしば通い、日本の酒を捨て、高級な外国のアルコール飲料をおぼえてしまった。豊臣は一銭も家に入れてくれないので、お春はお金を稼ぐためにまた踊りに出なくてはならなかった。

何という男なんだろうか！　豊臣はお春の献身的な愛をすべて忘れてしまったばかりか、もっと恐ろしいことが待ち構えていた。豊臣は外国の美意識を身につけて帰国しており、お春はもはや美人の範疇には入っていなかったのだ。芸者のなかで最も美しいだけでなく、日本の女性のなかでも最高の美形で、日本人女性の美の象徴だったかつての恋人が、豊臣にとってもはや美人ではなくなったわけだ。豊臣は酔っぱらって家に帰ってくると不機嫌になり、お春の歩き方から身のこなし、小さい尻、小さい胸、長細い顔、目尻が上がっていることを非難し、西洋の美しい女

性のこととなると、夢中になって喜びの声を上げるのである。そして、仏像のような大柄の西洋の女性を豊臣はこよなく愛した。とんでもないことだ。男のように大またで歩き、大きな尻と実際に変形したようなたんこぶを顔につけた獰猛（どうもう）で精悍（せいかん）な創造物に感嘆の声をあげていた。大きな口や高い鼻、そして、獰猛な濃いまゆ毛の真下にある窪んだ目は嫌悪を感じる。このような創造物はとても恐ろしい格好をしているので、日本の赤子は睨（にら）まれるとびっくりしてわっと泣き出すだろう。このような獣はとてもいまわしく、自分や西洋人について、うんざりするような調子で、気取って話をする。豊臣はこのような西洋の女性をえらく気に入っており、お春にも同様のことを諭（さと）すのである。ああ、とんでもないことだ！

なお悪いことに、豊臣はお春をときに殴（なぐ）ることがあった。そのうえ、吉原の混血女郎のことがとても気に入っていた。日本人の母とイギリス人の父を持つ娘のことを豊臣はとても魅力的だと思っていた。それは、「白い悪魔」の美人と似ているところがあったからだろう。

お春が一番嫌だと思ったのは、「お春よ、今晩、踊りに行ってお金を稼いで来い。そうしないと、おまえを殴るぞ。三行半（みくだり）を書くぞ」と脅かされることであった。以前は、そのようなことを一度も言われたことはなかったのだ。

「お地蔵様、お助けを！」と、お春はうめき声を発した。「とんでもないことだ！　とんでもないことだ！」

心に鉛があるようなお春の気持ちとは裏腹に、眠気を誘うような心地よい静けさが漂うある日の午後、お寺でお祈りをしていた。だがいっこうに御利益（ごりやく）はなく、お春の心は平穏とは程遠かった。あるとき、若い多少子どもじみたところのある僧侶が、意気消沈して祈願しているお春を興味ありげに見つめていた。その男はお春のことを知っていたが、お春はその男を知っているわけではなかった。お春はみごとな踊り手で、その人生は喜びに満ちたものだと思っていたのに、最近になってお寺に頻繁にやって来ていたので、何かあったのかなと心配していたのだ。僧侶はお祈りが終わるのを見計らってお春に近づき、手を合わせてお祈りをし、気持ちを落ち着かせようと話しかけた。すると、お春は結婚しているが、子どものためにお祈りをしているのではないことが分かった。先祖のためであるのはそれまでと同様であったが、はたして、それ以外に何のために来ているのだろう？　そのことを尋ねると、お春は突然涙を流し、返答しようとはしなかった。

敏感で知的な僧侶の顔は一瞬暗くなったが、大人気（おとなげ）なく泣いているたいていの人たちよりもお春が聡明なのではないだろうかと思った。お春は困難にぶち当たり、悩んでいるにちがいない。予想通り、お春は僧侶の深遠な知識の一端を理解し、微かな希望を見出した。シッダルタ・ガッ

タマの仏の哀れみに接し、お春の顔は輝いた。僧侶はお春を立ち上がらせ、座している仏像の前に連れて行った。そこで分かりやすい言葉を用いて、後年釈迦（しゃか）と呼ばれたガッタマの誕生をはじめ少年時代や壮年期、悲惨な世の中に対する嘆き、そして世界共通の真理の発見について話した。「生にしがみついているだけの人生というのは、悪である。人間の肉体は幻想であるが、人間の精神は前世からの無数の苦悩に耐えて永遠に生きるのである。つまり肉体は滅ぶが、その際に精神は肉体から離れ、涅槃（ねはん）の世界に移動する。涅槃とは極楽の状態をいい、心の平静から生じるえも言われぬ精神的な喜びが、前世からの苦悩に疲れはてている精神を落ち着かせる。釈迦ができたのだから、お春もそうすることができるかもしれない。つまり、自分自身を無にして涅槃の世界に入るのである」僧侶は以上のようなことを話したあと、手を合わせてお祈りをした。お春は僧侶の仏教の英知にかすかな光を見出し、少し心安らかな状態になったものの、まだまだ涅槃の世界には到達していなかった。

　言葉で表わせないような平穏な顔をしてそびえ立っている優しそうで神秘的な釈迦を、お春は見つめていた。何という安らかで、温和な顔をされているのだろう！　顔をじっと見ながら、僧侶の言った「生にしがみついているだけの人生は悪である。極楽の状態である涅槃の無我の境地になることで、心安らかな最高の精神的喜びが得られる」という言葉を思い浮かべていた。

　僧侶は三回もお春の様子を見に来たが、まだひざまずいて、聖なる釈迦の実に素晴らしい顔をじっと見つめている彼女の姿を目撃した。また複数の信者たちは、お春の顔が神々しく輝き穏やかな表情になっているのを見て感動した。

　お寺の中庭にある噴水が幻想的に飛び散り、その影が長く延び、辺りはうす暗くなり、静けさがいっそう深まった。お春は寛大な釈迦の前にひれ伏したあと、立ち上がった。このときには、自分と世間の人々に対して平常心でいることができ、気持ちが和らいでいた。お寺の石段のところで少し立ち止まり、残された最後の小銭でそこにいた年配の女性から鳥かごに入っていたすべての雀（すずめ）を買い取った。そして一羽ずつ涅槃の世界に行けるように小声でお祈りをささげ、空に飛ばして自由の身にしてあげた。

　お春の例のひいき客が、次のように絶叫していた。「ああ、放浪者で迷える子羊であるお春よ！　茶屋での舞踊に再挑戦だ！　ああ、人を夢心地にさせるような理想的な美形のお春よ！　幸いなるかな、眺めているだけでお春のとりこだ！　お春の優しさや美しさを満喫するだけで、幸せ者だ！　人間のなかでも最高に幸せ者だよ！　だってお春がまたやって来て、恋の奴隷にしてくれるんだから！　人類に喜びと誇りを与え、すべての動物を支配し、人間の勝利者であるお春よ！　どきどきするような美しさや燃えるような情緒、ものすごい情熱の持ち主であるお春

よ！　最高にすてきで威厳があり晴れやかで、舞妓のなかでも最高に優雅で優しく純粋であるお春よ！　皆さま方よ、喜ぼうよ！　お春が戻ってきたんだ！　大いに喜ぼうよ！　皆に元気を与えてくれる、華麗な舞妓であるお春！　芸者や舞妓の最高峰であるお春を満喫しようよ！」

　お春の復帰公演についての熱狂ぶりは、相当なものであった。今晩復帰といううわさがあちこちに広まり、かつてないほどひいき客が集まってきた。お春は、復帰公演において意気揚々としていた。悲しさと自尊心が多少入り混じってはいたが、思いやりのある上品さがあり、観客から敬意を払われていた。大観衆を収容するために、茶屋は、襖（ふすま）がすべて取り払われ、一つの大ホールのように改造された。それでも部屋の中は息苦しかった。お春の演技は実にみごとなもので、過去の自分を完全に覆い隠していた。それまで以上にお春は美しく、楽しそうで、かつ機知にも富んでいた。舞台のあいだの休憩中でも、才気あふれる即興の会話と温厚な冗談で、観客を笑いの渦に巻き込んでいた。夜も深まってくるにつれ、一段とお春の知られざる上品さや魅力、栄光が現われてきた。そして拍手喝采ののち、期待と畏敬の念のために、観客は静まり返り、お春は十八番の「忠臣蔵」の舞踊を迎えるだけとなった。

　三味線が荒々しく鳴り響き太鼓がとどろくと、お春が登場し舞踊が始まる。残忍で横柄な侍の血が、再び血管の中を火のように勢いよく流れた。そうすると観客は、魔法にかかったかのように再び中世の幻想の世界へと入り込んだ。お春の舞踊における力強さ、迫真性、感情移入は群を抜いていた。大胆にも、それまで夢にも見なかった高揚感を、即興で感情の全音域を用いて全身で表現した。このことにより、心情と芝居が一体となり、今まで以上に調和のとれたものになった。

　お春は、心情的に矛盾した混乱状態にある大石を次から次へと演じていった。中世の真の騎士道精神が、ますます強くなっているのは明らかだった。観客は、大石が本物の人間としての絶頂期を力強く歩いている姿をずっと見守っていた。大石は疑念や恐怖感をはじめすべての人間との関わりを廃し、真に仏への道を歩いているのである。観客は、利己的な自我を忘れ、極楽の境地に高められていった。そしていよいよ、最高の山場が訪れることになる。「しっ！」という声が聞こえ、見物人の心は直感的な期待感で激しく揺さぶられて悲痛な気持ちになり、すすり泣きが聞こえてきた。

　切腹の前にお春の顔の表情が変わった。天使のような感謝の気持ちと快活さで表情が明るくなり、まぶしすぎてほとんど見つめられないほどで、この世のものとは思えないようであった。最終章が始まるにあたり、三味線の低いかすかな音がしだいに大きくなり、悲痛な思いのすすり泣くような音を出した。お春が父君の刀をそっとなでると、観客は期待感から身震いをする。お春

は大石を死の世界、つまり静寂の涅槃の世界に誘う。体は小刻みに揺れ、顔の表情は極楽浄土に行ける喜びで輝いている。切腹の準備のために、お春は腰を下ろして身構える。そして伴奏が始まり、ますます大きな音で鳴り響く。一瞬、上のほうから刀が素早く振りおろされ、血が力強く飛び散った。

心配事のないような安楽の夜の心地よい静寂が、苦悩のあまりすすり泣く大勢の声に引き裂かれる。

「ああ、悲しいよ！　とても悲しいよ！　仏のようにすてきなお春がもういないんだから！」